マリアさんを再びお迎えして

三年前の〝幼児の教育〟誌に、〝私のオブザーベーションズ〟と題した文を寄せられた、メキシコの幼稚園の先生マリア・リー・ベナビデスさんをご記憶の方も多いと思います。そのマリアさんが帰国されて以来二年ぶりで来日されました。ちょうど同じころ日本に来られたエリザベス女王を上回るぐらいのハード・スケジュールの中を一日、私は渋沢丘陵の周郷先生のお宅へご一緒して、楽しくかつ意味深い時をすごしました。相変らず、短かい時間にまことに深くすべてのことを見、かつ感じとられ、またそれをできるだけ的確に私たちに伝えようとされたマリアさんの人柄には、今さらのように心打たれました。

メキシコのお土産から

マリアさんは周郷先生にお土産にと、ちょうどかものはしのような動物の置物をもっていらっしゃいました。手で持ち上げると割合に軽いので、何でできているのかとうかがうと、素焼のようなものをしんに、上に毛糸をまきつけてあるのだそうです。その毛糸の黄、赤、緑を基調とした色合いが、何ともいえず美しく、ちょっと日本人には真似のできないものです。そして手に持った感触も、毛糸のせいでしょうか、いかにも手作りといった、あたたかい感じなのです。そして私にも、赤と黒と白の糸で織られた四センチ幅くらいの、よくメキシコの民族衣裳に見られる、ベルトをくださいました。その上、娘たちにまで、メキシコのハンド・クラフト製品をくださいました。そして "traditional" (伝統的) であるということを熱をこめて強調されるのです。〝日本のこういうものはどうなっているのか〟との質問には、やっと近ごろ民芸品ブームなどといわれ出してきたばかりの現実を思って、私たちは恥ずかしい思いをしました。

周郷先生は、たまたま昨日先生を訪ねていらしたヨハネス・ブッシュさん（故ブッシュ・孝子さんのご主人）が、先生の畠に咲いたばらのにおいをかいでもにおわないとおっしゃった話をされました。東京のいろいろの公害（薬品とかガスとか）で鼻がきかなくなったとヨハネスさんはいわれたそうです。そして日本人は smell of human をも失ったのだともいわれたとか……。悲しい現実です。

そして、ブェノスアイレスは空気の美しいところ、東京はマロ・アイレスだとスペ

イン語で先生がおっしゃると、〃周郷先生、よくスペイン語を覚えていてくださいました〃とマリアさんは目を輝かせていわれました。

不思議な日本人

マリアさんは、たたみかけるように、〃周郷先生、教えてください。日本人は二つの生活をもっています。一つは human life もう一つは working life です。これはどうしてですか？〃と聞かれるのです。この二つを使いわけているのが日本人で、マリアさんのような純粋な方にはどうしても理解できない点なのでしょう。深く反省させられました。

また、マリアさんのお友だちマルタさんは、今回が初めての日本訪問なのですが、日本について印象の強かったことは、〃日本人に表情がない（表現が貧しい）〃ことだともいわれました。

先生はこの日本人の working life は mechanical life に通じているのであって悲しむべきことだとおっしゃいました。それに対して、マリアさんもマルタさんも〃メキシコにも都会には mechanical life がある。しかし日本とメキシコでは back ground が違うので現われてきたものも違う〃という意味のことをいわれました。

先生は話題を変えられ、マリアさんが日本に留学中、マリアさんのお父さまがメキシコから来日された時、羽田空港でマリアさんが本当に流れるような涙で迎えられた、それが非常に美しく感動的だったと話されました。今の日本人は泣くこと、涙を忘れ、子どもさえもあまり泣かなくなったこと、マリアさんは、〃私はすぐに cry cry なのだ〃と笑われました。そして自分は韓国系であるせいか、非常に東洋的で、日本は大好き、日本の食べ物も……天ぷら大好き、日本のお茶も〃といわれました。けれども家族の中でこういうふうに東洋的なのは自分だけだと。

メキシコの絵本

それからマリアさんは色の美しい一冊のうすい絵本を見せてくださいました。それはメキシコで初めて出された数学のための幼児用の絵本で、マリアさんやマルタさんのグループで作られたのだそうです。そして教師の手引きのようなものもちゃんとついています。数学といってもいわゆる数ではなく、まず大きい小さいの認識で、そこにはいろいろな動物が、あるいは親子の形で画かれ、またちがった動物が対象的に大きなもの（ゾウなど）小さなもの（カメなど）といったふうに画かれて、大きいものにはマルをつけ小さいものにはバツをつけるというものです。しかしここでもマリアさんが強調されたことは、この絵本だけで教えるということはしない、必ず実物を見

たり、さわったりすることと平行して行うということです。

簡単な形、三角、正方形、長方形、円といった形の認識も出てくるのですが、そこでもまわりを見回して、窓は正方形、ステレオ・プレーヤーは長方形、といったように指さして、こういうふうに実物と一緒に教えるのだと重ねていわれましたが、口先だけではないその熱の入れ方には感心させられました。

日本の教育は知識ばかりを詰込んで、インスタントに mechanical life に役立つ人間を養成していると先生はいわれてから、やはりヨハネスさんが、日本の子どもたちに玩具を与えすぎる親たちに、一言もの申したいといわれたと話されました。するとマリアさんも〝日本の玩具は実にたくさんあって、よくできている。しかしちょっとネジをまいたりスイッチを入れれば easy にせわしく動き、音をたてる〟と身振り手真似をまぜてユーモラスにいわれ、一同大笑いしました。要するにこういう玩具では、子どもの創造性も自発性も育たない、ということではないでしょうか。

中国のこと

ここで、奥さまお心づくしの天ぷらでお昼をご馳走になり、いよいよ、一番先生が期待していらした、マリアさんの〝中国見たまま〟をうかがうことになりました。

今回のマリアさんの中国行きは、旅行者として行かれたわけで、その意味で、招待されて訪問した人たちの印象とか報告とは大分違った、興味深いことをうかがうことができました。

中国のいいところと悪いところ

まず田舎は、景色は美しいし、働く人たちは、朝から晩まで非常によく働いて、それは大変いいと思った。しかし中国の人は、決して一人で行動しない、必ずグループで行動していた。

旅行のスケジュールはおおよそのことはメキシコの旅行社の方で決っていたが、たとえば細かい毎日の予定、宿泊の場所などは、すべて中国側が決定するらしく、中国に行くまで、何もわかっていなかった。そして一日に四つも工場見学（刺しゅう、象牙細工など手工芸品の）がある。行きたくないようなようすをすると〝それならあなたは病気か？　病院へ行った方がいいのではないか〟といわれる。すべて何か政府の管理下に行動させられたという感じだった。工場へ行くとちゃんとスペイン語で二十分から一時間も、グループの中の一人が説明をしてくれた。これもまた非常に統制されているような感じだった。

彼らは“China is the best.”といい、何事によらず中国独自で開発したものであって、外国のものはとりいれていない、とい

う。しかしスペイン語を話すということは、矛盾しているのではないか。

そして一様に、革命以前の中国人は貧しいくらしをしていた。しかし今は違う、田舎でさえも衣食住に困らない生活をしているという。毛沢東さえも一般人民と同じように働き、同じような生活をしている。これは事実で、経済的にはすべての人が平等である。

また、毛沢東以前は中国人は孔子をあがめ孔子の教えを守った。しかし今は、中国はキリスト教国ではないので神をもたない、そのかわりに毛沢東を神のように思っている。

中国人は、一人で行動しないといったが、私たちも一人歩きは禁じられ、町を歩く時もグループで歩いた。するとまわりにすぐ人垣ができ、見世物のように見られた。そして主に私たちの着ているものが珍しがられたようだ。なぜならば中国人たちは皆同じもの（人民服）を着ているから……。そして反対にちょっと中国の人に近よろうとすると彼らはサッと身を引く。けれども二十年以上も旅行者を国に入れなかった中国であるから、現在二十歳の青年でさえ、外国人を見るのは初めてであるわけで、無理のないことだと思った。

経済的なこととなると、いわゆる手工芸品はとても高価で、中国人には買えないぐらいである。でもこれは、そういう品々がぜい沢品で中国人は必要としないのかもしれない。給料生活者のサラリーは本当にわずかで、三十ジュアン（元）＝十五ドル、しかしほぼ三ＤＫの住宅の家賃が二ジュアンで、食物、衣類すべて生活必需品は安いので暮しには困らない。そしてこの住宅もやはり一家族が孤立して住むというのではなく、中国中どこへ行っても community（組織）を作って暮している。そこには病院、学校、保育所（幼稚園ではない）等の施設が完備している。そして婦人はすべて働く、この働く場所も、それぞれの community の中に組織的に作られている。

中国について、いいと思ったことは大学入学のこと、一人の青年が高校を卒業して大学で勉強したいと思った場合、決して個人の意志では実現しない。その community の人たちが、彼または彼女が大学へ行って勉強し、将来また戻ってきてみんなの役に立つ人間であるかどうかを認めてくれないかぎりは大学へ行かれない。メキシコでは誰でも望むものは大学へ行かれる。しかし卒業する者はほんのわずかである。この無駄にくらべれば中国のやり方はなかなかいいと思った。

ここで周郷先生が、日本では大学へ入った者は大体一〇〇パーセント卒業できる。そのかわり入学試験が非常に severe であると話され、マリアさんが目を丸くして〝一〇〇パーセント？〟とびっくり

なさる一幕がありました。

このほか、思い出したこととしては、都会では一匹も犬がいなかったということ。それからずっと南、広東へも行ったが、そこの人たちはちょっと北京や何かの人と違って、白い服を着ていた。暑いせいか、またホンコンなど外国との接触があるせいかもしれない。

ともかく一言でいえば、中国の人たちと中国は、非常に political（政治的）であるといえる。そして中国の一番大きな間違いは、彼らが "China is the best" といい、そう信じていることだと思う。

マリアさんはこのほかにもいろいろ、ショッキングなこともあったと話されましたが、終始表情豊かに、時に少女のようなしぐさで、私たちに話されました。私が考えていたより中国に対して積極的な好感はもたれなかったようです。でもこれは、その前の雑談の時に先生が〝第二次世界大戦後の日本〟といわれると、〝日本は二つもそんな大きな戦争を経験したのか、メキシコはそういう経験はもっていない〟ととてもびっくりしたようにいわれた、そんな、国の歴史の違いなどにもよるのかもしれません。とも角、私にとって、非常に貴重な、そして楽しい時をもつことができました。二日後にはまたメキシコに帰られ、今度は五年ぐらいたたないと再び日本には来られない、とも角日本へ来るのには相当経費がかかるので……と〝周郷先生、きっと、メキシコへ来てください〟とポロポロ涙を流して先生のお宅をあとにされました。（赤間記）

（一九七五・五・一九）

幼児の教育　第七十四巻 第九号

九月号　©　定価二〇〇円

昭和五十年八月二十五日印刷
昭和五十年九月　一　日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします